Jane Austen の小説における手紙：その言語の特徴と果たす役割*

松　谷　　緑

はじめに

本稿では、Jane Austen（1775-1817）の小説の中の「手紙」に注目し、その言語の特徴や作品における意味について考察する。18世紀の書簡体小説の流れをうけて、Austen も少女期の作品、例えば *Love and Friendship* や、おそらく1793-1794年に書かれたであろうとされる習作 *Lady Susan* では書簡体を用いている。*Pride and Prejudice* も前身は書簡体であったとも言われている。完成した小説では、書簡体という形を残していなくても、物語の展開の中で重要な役割を果たす手紙がいくつか存在する。本稿ではまず、Austen の小説が出版された当時、手紙というものが一般にどういうものであったかについての若干の情報を整理し、その上で、*Mansfield Park, Emma, Pride and Prejudice, Persuasion* において登場する手紙が作品中果たす役割を考察する。特に、*Pride and Prejudice* と *Persuasion* では、それぞれ物語の中で、女主人公に宛てて将来その夫となる重要な男性が書いた手紙を取り上げ、分析を試みる。いずれも主人公に多大な影響を与えるもので、物語の中でも大切な分岐点、あるいはクライマックスを提供するきっかけとなる手紙である。

1．18世紀～19世紀の郵便

パソコンや携帯電話でのメール通信が手軽にできるようになった現代、Eメールに比べれば、手紙をしたため、郵便で送るという手段はむしろ費用のかかるものと言えるかもしれない。それでも、今日、手近にある便せんに文章を書いて封筒に入れ、切手を貼ってポストに投函すれば国内はもとより海外でもたいていの知人に手紙は届けられる。そんな現代では想像し難いかもしれないが、18世紀はまだ遠方への手紙が誰にでも気軽に出せる時代ではなかった。

18世紀から19世紀にかけては、英国において郵便制度が急速に発達した時

代でもある。これは、まさにAustenが生きた時代と重なる。既にロンドンでは17世紀終わりにはかなり整備されていたが、ロンドン以外の地域では、18世紀を通じてまだ郵便は遅くサービス自体があてにならないものであった。[1] 郵便の量が増すに連れて、料金も上昇した。ロンドン市内とその周辺なら料金は均一1ペニーでLondon penny postと呼ばれたサービスが、1801年には倍の2ペニーになった。当時まだ現在のような切手も存在しなかった。郵便切手が発行されるのは1840年である。*Oxford English Dictionary*の'postage stamp' の項にも以下のようにある。

> The name *stamp* was originally applied to the marks stamped or impressed by the Post Office on letters for various purposes, among others that of stating whether they were 'prepaid', 'unpaid', 'free', partly paid, or paid by the twopenny or other post. When adhesive labels and impressed envelopes were introduced in 1840, these took the place of the 'paid' or 'prepaid' stamp, and appear to have been popularly called 'postage stamps' from the first. The official and more accurate name was *postage label*; but the popular usage prevailed; by 1850 *postage label stamp* was in official use, and finally *postage stamp* was accepted. The actual *stamps* (Ger. *briefstempel*) which continued to be impressed by the Post Office after 1840, to show the place and date of postage and arrival, and to obliterate or deface the postage-label, are now usually distinguished as *post-marks* and *obliteration-stamps* or *-marks.*

stampが切手の意味になったのもこういった経緯による。また、当時は、封筒もあまり普及しておらず、あるサイズの紙に文章を書き、それを折って封じた。料金も重量ではなく、紙の枚数であった。従って、当時の手紙には、小さな文字で紙面を縦横隅々まで利用して文字が記されている物が多く残っている。郵便を遠方へ送る費用は高価であったが、議員には無料配達の特権があった。

以上のようなことをふまえて、*Mansfield Park*の以下の一節を読むと、Fanny にとってEdmundの親切が如何に身にしみたかがよく理解できる。

> "William did not like she should come away -- he had told her he

should miss her very much indeed." "But William will write to you, I dare say." "Yes, he had promised he would, but he had told *her* to write first." "And when shall you do it?" She hung her head and answered, hesitatingly, "she did not know; she had not any paper."

"If that be all your difficulty, I will furnish you with paper and every other material, and you may write your letter whenever you choose. Would it make you happy to write to William?"

"Yes, very."

"Then let it be done now. Come with me into the breakfast room, we shall find every thing there, and be sure of having the room to ourselves."

"But cousin -- will it go to the post?"

"Yes, depend upon me it shall; it shall go with the other letters; and as your uncle will frank it, it will cost William nothing."

"My uncle!" repeated Fanny with a frightened look.

"Yes, when you have written the letter, I will take it to my father to frank." (MP 16)[2]

引用部終わりの方の、'frank' というのが、議員特権を行使し郵便料を無料にすることで、Edmund の父親は議員であるので、父親に頼んで郵便を無料にしてあげるから、受け取り人の William（Fanny の兄）には費用が課せられないと言っているのである。家庭の事情で大好きな兄と離ればなれになって伯父の家で肩身の狭い思いで生活している内気な Fanny にとっては手紙を出すことすらままならないが、そんな Fanny に Edmund がやさしく接する様子がよくわかる場面である。また、ここでの Fanny の発話の提示については、Pascal によっても、間接話法から自由間接話法を経て直接話法へという意図的な移行が心理描写の上で効果的であると指摘されており、話法のスタイルの点で興味深い部分である。[3] こういった話法上の効果を活かしながら、Fanny の Edmund に対する感謝・信頼が芽生えてゆく様子を描き、二人の心理的距離を近づけるきっかけを作るものとして、手紙が大きな役割を果たしている。

2．手紙の文章を評する

Emma では、主人公 Emma が年下の Harriet に頼まれ、ある男性の手紙

の文章について評する部分がある。農夫であるRobert Martinに偏見のあるEmmaだが、彼がHarrietに宛てた手紙の文章について、次のように分析する。

> "Will you read the letter?" cried Harriet. "Pray do. I'd rather you would."
>
> Emma was not sorry to be pressed. She read, and was surprized. The style of the letter was much above her expectation. There were not merely no grammatical errors, but as a composition it would not have disgraced a gentleman; the language, though plain, was strong and unaffected, and the sentiments it conveyed very much to the credit of the writer. It was short, but expressed good sense, warm attachment, liberality, propriety, even delicacy of feeling. She paused over it, while Harriet stood anxiously watching for her opinion, with a "Well, well," and was at last forced to add, "Is it a good letter? or is it too short?" (E 50-51)

「その手紙のスタイルはEmmaが思っていたよりずっと優れたものだった。文法の間違えがなかっただけでなく、文章としてジェントルマンに恥じるものではなく、言語は単調だが、力強く気取りのないもので、そこから伝わる気持ちは書き手の面目を施すものであった。短いが、良識、心からの愛情、寛容さ、節度、心遣いが現れていた。」とある。しかし、この引用箇所の直後で、Emmaは想像していたよりも優れた手紙だが、先日見かけた男性が書いたものとは思えず、姉妹の誰かに手伝ってもらったのではないかとまで訝る一方で、力強く簡潔なスタイルはやはり女性の手によるものではなさそうだと言う：

> "Yes, indeed, a very good letter," replied Emma rather slowly-- "so good a letter, Harriet, that every thing considered, I think one of his sisters must have helped him. I can hardly imagine the young man whom I saw talking with you the other day could express himself so well, if left quite to his own powers, and yet it is not the style of a woman; no, certainly, it is too strong and concise; not diffuse enough for a woman. No doubt he is a sensible man, and I suppose may have

a natural talent for -- thinks strongly and clearly -- and when he takes a pen in hand, his thoughts naturally find proper words. It is so with some men. Yes, I understand the sort of mind. Vigorous, decided, with sentiments to a certain point, not coarse. A better written letter, Harriet, (returning it,) than I had expected." (E 51)

この手紙の書き手はおそらく思慮分別もあり判断もしっかりした人物であろうと言い、立派な手紙と認めつつも、身分が不釣合いだとして、Emma は Harriet にこの求婚を断らせる。この点で、Robert Martin は分別のある立派な青年で Harriet にはもったいないくらいだとの見解を持つ Mr Knightley と意見が対立する。最終的には、手紙の印象、そして Mr Knightley の見解が正しく、Harriet と Robert Martin は物語の終わりで結婚する。

そもそも、身分不相応とするだけの背景が Harriet にあるわけではない。Harriet の幸せを考えるより自らの勝手な思いこみと満足のために、この縁組を壊そうとするのは、Emma らしい過ちといえるであろう。もっとも、手紙の文章を分析し評するだけの能力を持っていることは、読者に Emma の知性を印象づけるものであるし、この主人公が物語の終盤へ向けて成長してゆくことを期待させるものであろう。

3．事実を打ち明ける手紙

Pride and Prejudice では、Mr Darcy が主人公 Elizabeth に一度目の求婚を断られた後に、弁明の手紙を書いて渡す。この求婚自体、Elizabeth にしてみれば、鼻持ちならない高慢な求婚の仕方であり、一方 Mr Darcy にすれば自分のプライドを譲ったつもりの求婚を断られ、双方にとって居心地の悪いものであった。二人の間の誤解を解こうとして Mr Darcy は長い手紙を書くのである。この手紙により、物語の展開においては、Elizabeth に見えていない事実や経緯を Mr Darcy に説明させ、読者も Elizabeth の視点を介して、それを読み、新たな事実を知ることになる。数ページにわたるその手紙は次のように始まる：

"Be not alarmed, Madam, on receiving this letter, by the apprehension of its containing any repetition of those sentiments, or renewal of those offers, which were last night so disgusting to you. I write without any intention of paining you, or humbling myself, by dwelling on

wishes, which, for the happiness of both, cannot be too soon forgotten; and the effort which the formation, and the perusal of this letter must occasion, should have been spared, had not my character required it to be written and read. You must, therefore, pardon the freedom with which I demand your attention; your feelings, I know, will bestow it unwillingly, but I demand it of your justice.

"Two offences of a very different nature, and by no means of equal magnitude, you last night laid to my charge. The first mentioned was, that, regardless of the sentiments of either, I had detached Mr. Bingley from your sister, -- and the other, that I had, in defiance of various claims, in defiance of honour and humanity, ruined the immediate prosperity, and blasted the prospects of Mr. Wickham. (PP 196)

紳士らしい冷静な言葉遣いで、複文構造・重文構造の長い文がつらなる、丁寧に書かれた手紙である。作家はこの手紙を利用して、登場人物の生い立ちや過去の出来事を、語り手ではなく、信頼のおける一登場人物に語らせるという物語の構造を作る。更に、この手紙は、書くことによって語りかけている Mr Darcy と、その手紙を読む Elizabeth という二人の登場人物の心理的な距離の接近を促すものでもある。もちろん、この手紙の直後に、'Her feelings as she read were scarcely to be defined.' とあり、Elizabeth はすぐに納得するわけではない。書き手の文章やそのスタイルを相変わらず傲慢と考える。上記の引用部にあるように、その内容には二つあり、一つは、Elizabeth の姉 Jane と Mr Darcy の友人 Mr Bingley との恋愛について、もう一つは Mr Wickham の性格やこれまでの行いについてである。Elizabeth にとっては、特に、その前者について、書かれている事柄に怒りを禁じ得ないのであるが、一方、二つめの Mr Wickham の話については、幾分納得するところがあると考える。

In this perturbed state of mind, with thoughts that could rest on nothing, she walked on; but it would not do; in half a minute the letter was unfolded again, and collecting herself as well as she could, she again began the mortifying perusal of all that related to Wickham, and commanded herself so far as to examine the meaning of every sentence. (PP 205)

時に憤りながら、しかし、Elizabeth は何度も手紙を読み返し、考える。そして、姉と Mr Bingley のことについては譲れない気持ちでありながら、Mr Wickham への評価については自分の見方が誤っていたことに気づく。

> How differently did every thing now appear in which he was concerned!. . .
>
> She grew absolutely ashamed of herself. -- Of neither Darcy nor Wickham could she think, without feeling that she had been blind, partial, prejudiced, absurd. (PP 207-208)

手紙の後には、読んだ後の Elizabeth の気持ちが表されていくが、自分と Mr Wickham との過去のやりとり、彼が言ったことなどの回想も挿入され、Elizabeth の視点に立った語りとなっている。上記の引用にある感嘆文も Elizabeth の心の中で発せられた声である。読者は Elizabeth と共にこの手紙を読み、この主人公が自らの偏見を改める気持ちになる一つの過程を共に体験することになる。物語の展開において、この手紙は次の二つの点で極めて重要な役割を果たすと言える。すなわち１）少なくとも Elizabeth にとって高慢この上ないと映っていた Mr Darcy がこれほどの長い手紙を真剣に誠実に書いて渡したこと、その内容には自らの妹に降りかかった一般にはあまり他言したくないことも含まれていたこと、これらは、Elizabeth に彼の誠実さと彼が特別な思いを持ってその手紙を書いたことを印象づける。２）事実を知ることにより、Elizabeth の Mr Wickham への見方が改められる。また、Mr Darcy への偏見が和らげられることにもなる。一方、作品手法としては、手紙というスタイルを採用することで、作品の登場人物がとった行動の理由を本人に弁明させたり、一般には知られていない過去の出来事を暴くといったことが、自然な形で読者にも伝えられる仕組みとなっている。

４．クライマックスを演出する手紙

Persuasion では、小説の終わりの方で、主人公に宛てられた手紙がクライマックスの場面で効果的に使われる。主人公の Anne と Captain Wentworth はかつて恋人同士であった。8年ぶりに再会するが、心のわだかまりにより二人は容易に打ち解けない状況となっている。今も Captain Wentworth を愛している Anne の視点を中心として物語は進行する。実は Captain Wentworth も Anne を愛していることを明かすのに、手紙が用い

られる。その手紙を書かせるきっかけとなる会話の場面で、Anne は Captain Wentworth の友人 Captain Harville と話をしている。場面の仕組みとして、巧妙なのは、Anne が女性一般を借りて自分の気持ちを語るのを、少し離れたところで、書き物をしている Captain Wentworth が聞いているという設定である。

Captain Harville の妹 Fanny は若くして亡くなっているが、かつてその Fanny と婚約していた Captain Benwick が、今度 Luisa という女性と結婚することになり、Captain Harville にとって妹である Fanny のためだった小さな肖像画を別の女性へ送る役割にあるという話から、男女の愛についてのちょっとした議論が始まる。すなわち、男女のどちらが忘れっぽいか・・・という話である。もちろん、Anne の主張は「真に愛する相手なら、女性は男性ほど早くは忘れない」である：

> "Poor Fanny! she would not have forgotten him so soon!"
>
> "No," replied Anne, in a low feeling voice. "That, I can easily believe."
>
> "It was not in her nature. She doated on him."
>
> "It would not be the nature of any woman who truly loved."
>
> Captain Harville smiled, as much as to say, "Do you claim that for your sex?" and she answered the question, smiling also, "Yes. <u>We certainly do not forget you, so soon as you forget us</u>. It is, perhaps, our fate rather than our merit. We cannot help ourselves. We live at home, quiet, confined, and our feelings prey upon us. You are forced on exertion. You have always a profession, pursuits, business of some sort or other, to take you back into the world immediately, and continual occupation and change soon weaken impressions." (P 232)

しばらく会話が進み、Captain Harville が「この問題で、同意に至ることはないでしょう。」と言いかけたとき、Captain Wentworth がペンを落とす：

> "We shall never agree upon this question" -- Captain Harville was beginning to say, when a slight noise called their attention to Captain Wentworth's hitherto perfectly quiet division of the room. <u>It was nothing more than that his pen had fallen down, but Anne was startled</u>

at finding him nearer than she had supposed, and half inclined to suspect that the pen had only fallen, because he had been occupied by them, striving to catch sounds, which yet she did not think he could have caught.

"Have you finished your letter?" said Captain Harville.

"Not quite, a few lines more. I shall have done in five minutes."

(P 233-234)

ペンが落ちただけのことだったが、Anneは彼が思っていたより近くにいた事に気付いて、はっとする。彼が自分達の話に気をとられ、声を捕らえようとしてペンを落としたのではと半分疑うが、もっとも、聞こえてはいないだろうと思いなおす。結局二人の男性は立ち去るが、Captain Wentworthだけ引き返してきて、彼が先ほど書き物をしていたテーブルの上の散らかった紙の下からAnneにわかるように手紙を引き出して再び立ち去る。AnneとCaptain Harvilleの会話の途中で彼がペンを落とすあたりから、Anneが手紙の存在に気付くところまでの細かい描写は、演劇か映画のシーンのように読者の脳裏にその場面を生き生きと描かせる。それに続くCaptain Wentworthの手紙は以下のように始まる情熱的なものである：

"I can listen no longer in silence. I must speak to you by such means "as are within my reach. You pierce my soul. I am half agony, half hope. "Tell me not that I am too late, that such precious feelings are gone for "ever. I offer myself to you again with a heart even more your own, than "when you almost broke it eight years and a half ago. Dare not say that "man forgets sooner than woman, that his love has an earlier death. I "have loved none but you. . . . (P 237)

短い時間で、しかもAnne達の会話を聞きながら、急いで書かれたものとはいえ、前節で取り上げた*Pride Prejudice*のMr Darcyの理性的な手紙と極めて対照的である。文は短く、また、そこに盛り込まれる事実についての情報といったものはほとんどない。感情をあふれるままにつづった求婚の手紙であり、この物語のクライマックスを作り上げている。

おわりに

本稿では、「手紙」が小説の中で果たす役割について、Austen の 4 つの作品を取り上げ考察した。Austen の小説において、当時の郵便事情ならではのエピソードが用いられたり、手紙を介して、登場人物の人間関係やその変化する様子が描き出されていることを指摘した。本来、手紙は誰かが誰か特定の人物に宛てて書くものである。小説の中で、それを読むことになる読者は、手紙の書き手と読み手の両方の視点を行き来しながら、書き手から読み手にのみ伝達されている情報をかいま見るのである。そうした設定が特に、*Pride and Prejudice* の Mr Darcy の手紙や *Persuasion* の Captain Wentworth の手紙において巧みに活かされている。これらの手紙は、舞台でいえば、一つの鍵を握る重要な小道具のような役割を果たし、劇的な効果を生み出しているといえるであろう。

注

＊　本論文は、平成17～19年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「18-19世紀の英語散文テクストの言語と文体：当時の女性が用いた英語の特徴を探る」（研究代表者 松谷　緑　課題番号17520329）による研究成果の一部である。

1．Jo Modert, 'Post/Mail' in *The Jane Austen Handbook* ed. J. David Grey (London: The Athlone Press, 1986), pp.345-346.

2．以下、Austen からの引用はすべて *The Novels of Jane Austen* by R. W. Chapman (3rd ed. 1932-34; rpt. Oxford University Press, 1986) の版による。引用の後の（　）内には作品の略号とページ数を表わす。略号リストを以下に示す。MP: *Mansfield Park,* E: *Emma,* PP: *Pride and Prejudice,* P: *Persuasion.*　引用内の下線部は筆者による。

3．Roy Pascal, *The Dual Voice: Free Indirect Speech and its Functioning in the Nineteenth-Century European Novel* (Manchester: Manchester University Press, 1977), pp. 45-60